

1 「白いぼうし」(私の読み)

田中さん、黒瀬さんの読みに基本的に同意しますが、「白いぼうし」は小学校教材ですから、文学の専門家ではない普通の小学校教師にも分かるように易しい言い方はできないのでしょうか。私は以下のように読みます。

*「白いぼうし」の冒頭は次のようになっています。(「これは、レモンのおいですか。」ほりばたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。「いいえ、夏みかんですよ。」)

ここで、「レモン」と「夏みかん」が対比されています。(ここで出てくる「夏みかん」は、今食べられている「甘夏」のことではありません。酸っぱい「だいたい」のことです。)

「レモン」は、明治期から日本で栽培されはじめたようですが、一般に普及するのは、食事の洋食化に伴ってのことです。しかも、大半はアメリカからの輸入です。ですから、「レ

モン」は、「アメリカ、近代、洋風、都市」といったイメージを伴います。それに対して

「夏みかん」は、江戸時代から栽培されてきたもので、夏場に無い柑橘なのでその点重宝されましたが、酸っぱいだけなので次第に廃れてきました。したがって「夏みかん」は、「日本、田舎、素朴、自然」といったイメージを伴います。

「白いぼうし」は、レモンのなもの(都市空間)と夏みかんのもの(自然)とが対比的に展開する物語です。レモンのものは、「しんし」「信号」「大通り」「細いうら通り」「車道」「四角い建物」「菜の花橋」「水色の新しい虫とりあみ」「小さな団地」と展開していきます。夏みかんのものは、「いなかのおふくろ」「緑がゆれているやなぎの木」「白いぼうし」「もんしろちょう」「夏みかん」「いいにおい」「おかつぱのかわいい女の子」「菜の花横町」「白いちょう」「クローバー」と展開していきます。夏みかんのものの基調にあるものは「さわやかなかおり」(田舎から届けられた自然)です。

都市空間と自然との対比で重要な意味を持つものが二つあります。

一つは、「水色の新しい虫とりあみ」と「白いぼうし」の対比です。「虫とりあみ」は蝶を捕獲するためのものです。いわば、自然と敵対するものです。蝶を「獲物」とも言っています。(もちろん、男の子や母親にそういう自覚はありません。それが当たり前の社会に生きているのですから。紳士が夏みかんを知らないというのも同じことです。つまり、自然から切り離された都市空間にあって、そのことに無自覚で生きているわけです。)

「白いぼうし」は、「虫とりあみ」と「もんしろちょう」をつなぐ役割を果たしています。(作

者のあまんさんは、「洗いざらしの布製の帽子」をイメージしているそうですが、それは、

「新しい、水色の虫とりあみ」と対照的であるということです。「洗いざらし」はともかく、帽子の色は白でなければなりません。なぜなら、それが「白いもんしろちょう」を生み出すからです。また、もんしろちょうの代わりに「夏みかん」であることも重要です。それらは「自然、素朴、爽やかさ」というイメージでつながっているからです。

もう一つは、「菜の花横町」と「菜の花橋」の対比です。女の子は「菜の花横町ってあるかしら。」と聞いているのに、松井さんは「菜の花橋のことですね。」と応えています。これはどういうことでしょうか。

同じ場所に二つの名前があるということは、以前は「菜の花横町」と言っていた所が、今は「菜の花橋」という所になっているということです。なぜそうなったのかというと、「菜の花横町」と言っていた横町は取り壊されて、今は「菜の花橋」という橋が架かっています。「菜の花横町」という名から、菜の花がいっぱい咲き誇っている場所というイメージが湧くのはごく自然です。そういう自然が、ブルドーザーによってならされ、橋という人工物ができている場所、それが「菜の花橋」という名が示す場所です。「菜の花横町」があった自然が、開発によって失われ、今は人工的な橋になっている、ということです。

橋のある所が「菜の花橋」という所だと一応考えて良いのですが、しかし、蝶の出現によって「菜の花横町」が再現されたということは、失われたのではなく、現在の町の下に封じ込められていたというべきでしょう。封じ込められていた「菜の花横町」が、「白いぼうし」という装置を使って再現されたというのが、「菜の花横町」と「菜の花橋」が同じ場所に存在する叙述の読み方です。

松井さんには「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」という、「シャボン玉のはじけるような、小さな小さな声」が聞こえてきます。それは松井さんの幻聴だったのでしょか。そうではありません。松井さんという人は、そういう特殊な能力を持った人なのです。それは、「車のいろは空の色のいろ」というシリーズ全体を読んで見れば分かります。

II 実践について

1 5時の授業

この場面は、松井さんが視点人物で、男の子は対象人物、チョウは人物ですらないのですから、男の子やチョウの気持ちを語らせるのは、視点論からすれば間違いということになるのですが、それでは物語の深層は見えないという黒瀬さんの指摘は正しいと思います。男の子とチョウを対比させたこの授業は成功していると思います。

一人の生徒が、「松井さんって優しくないじゃん。」と発言したことから、「人間ってひどすぎる。」「命をもらわないと心がいきられない。」となり、「生きる意味って何なのかな。」と展開したことは、紳士や、男の子や母親と同じ日常感覚で生活していた子どもたちの認識に亀裂を生じさせたということです。

男の子と母親は、「チョウが夏みかんに化けた」ことに驚いたでしょうが、しかし、そ

れ以上のことは分かりません。しかし、読者には分かります。それが文学です。

2 6時の授業

6時の授業を振り返って、黒瀬さんはこう言っています。「チョウの声が松井さんにだけ聞こえたことのみが重要なのではなく、チョウの声が聞こえることの意味を「たけのたけお」等のまなざしと関連付けながら読むことが肝要だった」。

私は、この最後の場面では、みんなで、黙って、目をつむって、1, 2分間「チョウの小さな声」を聞いてみてはどうかと思います。そして、それから、「小さな声を聞く」ことの意味を考えたらどうかと思います。

「白いぼうし」は、「失われた世界（自然）を見つける」ということが基調のテーマですが、それは、「小さな命（チョウ）のかすかな声を聞き取る」ことによってなされます。この「小さな命のかすかな声」を聞き取るということは、あまんさんの幼い時の体験によって獲得された能力です。

あまんさんは、彼女の唯一の随筆集限『空の絵本』（童心社）でこのようなことを書いています。

「幼いころ、私も、よく花を摘みました。どうして花をみると、あんなに胸がわくわくして摘みたくなったのでしょうか。子どもの視線が、花に近いからでしょうか。まさに、目の前に花は咲いていました。花びらに涙のようにたまっている雫をみつけたとき、てんとうむしや蟻に出会ったとき、そして花にとまった蟻が細長い管を花芯にさしこむのを見つめたとき……あの喜び、あの心の高ぶりは、今も鮮やかに体内からよみがえってきます。」(7 ページ)「数年前、私のもとに一つの小包が届きました。大きさは百科事典ぐらい、大変軽いものでした。……その葉の中に、一枚の便箋がたたんで入れてありました。担任の先生の手紙でした。「お返事ありがとうございました。一略一今朝、私はびっくりしました。子どもたちが落ち葉をいっぱい拾って学校に来たのです。あまんさんがてがみに“そちらの木の葉はもう赤や黄色になりましたか？どんなでしょうね。”と書かれていたので、子どもどうし話し合っ昨日落葉拾いをしてきたというのです。葉っぱは綺麗なもののばかりではありません。けれど一枚一枚、子どもたちが拾ったと思うと、みんな送りたいになりました。どうぞ北の小さい町の秋をあげてください。一略。」何気なく書いた一行の言葉に、こんなすばらしい贈物を……、私は胸がいっぱいになりました。箱の中の葉を手にとってながめ、手にとってながめ、一枚一枚重ならないように気をつけて、畳の上にひろげていきました。気がつくと、私は美しい落葉にとり囲まれて座っていました。「まるで秋の林の中」そうつぶやいたとたん、くらっと眩暈がしました。部屋は一瞬、秋の林にかわりました。そして遠くから子どもたちの弾んだ笑い声や話し声がきこえはじめました。」(20～22 ページ)

・「そのとき、幼い私は木の下で泣きじゃくっていました。何が原因だったのでしょうか。そばにいた若い母が腰をかがめて私の耳もとにそっといいました。

「ほら、桜が笑っているわよ」私はびっくりして顔をあげました。満開の花びらが舞い散っていました。私はいつそう泣き声をあげました。「桜がきみこのことを笑ってるの？」「ちがう、ちがう」母はハンカチで私の涙をふきながらいいました。「桜はね、春がうれしいの。うれしいときって、誰だって

笑いたくなるでしょう。だから、春よ春よって笑っているの」「ふうん」わたしは目をばしばししながら桜をみあげました。「「しーっ。耳を澄ましてごらん。花びらの笑い声がきこえるから」私は泣くじやくりを懸命にこらえました。しばらくみみを澄まして、はっとしました。「きこえた。きこえたよ」私の言葉に、母は笑顔でいいました。「「ほらね、桜のはなびら笑いよ。きみこちゃんも花びら笑い」幼い私はうれしくなって笑い出しました。」(36～37 ページ)

しかし、子どもが持って生まれたこうした力も、大人になるにつれてしだいに薄らいでいきます。そうならないためには、そのことを意味づけなければならぬ。あまんさんは次のようにも書いています。「ほんの少し大きくなって、「おはよう」—「おはよう」、「こんにちは」—「こんにちは」の次に、「さよなら」—「さよなら」がいえるようになったのは、いつのころだったのでしょうか。咲いている野の花をわがものにすることをためらうようになることが、少女期にむかっての歩みだった気がします。」(10～11 ページ)「幼いこどものときに出会った情景、風景、言葉は、心の芯に深くしまわれ、時を経てひらりとよみがえってくる—、そしてその人を励ましたり癒やしたりする—、生きているということは、なんと不思議で有難いことでしょう。」(38 ページ)「私は、まだ若いころ、いろいろなできごとやいろいろな思い—喜びも哀しみもはずかしさもうしろにふり捨てながら、前へ前へと進んでいるように思っていました。けれど四十歳を過ぎて、自分が何一つ捨ててはいなかったことに気がつきました。私は自分の過去のすべてを、喜びも哀しみもはずかしさも抱え込みながら生きていたのです。そうってみまわすと、意識するかしないかはそれぞれでしょうが、人は誰でも、その赤ちゃんの時代、幼年期、少年少女期、青年期、壮年期……と、ちょうど木の年輪のように体内に抱えながら生きていることに気がつきました。そしてその内奥を深くたどっていくと、私たちの思念は、意外なほど年輪の中の部分—幼年期の感覚に支持されているように思われました。」(45～46 ページ)。

同じことをまどみちおも次のように言っています。

「生きるためには、どうしたって何かを食べたり飲んだりしなきゃならぬ。子孫を残すためには性欲を使わんとならぬ。それは、すごく自然なことですよ。単細胞生物なんかは自分自身を分裂して増えていくらしいですが、雌雄の別のある生き物の場合は、みんなどんなに小さくても人間と同じようなことをしながら生きている。だったら、蚊やノミだってオナラやアクビをするかもしれんじゃないかと考えちゃうんですよ。」(『いわずにおれない』 集英社 36 ページ)

谷川俊太郎は、耳を澄ませばいろいろな音が聞こえてくると言っています。＜ハイヒールのこつこつ ながぐつのだたどた しんでいきょうりゅうのうめき かみなりにうたれもえあがるきのさけび うまのいななき ゆみのつるおと みみもとにうなるたまおと＞(「みみをすます」)。物理的に聞こえるはずのない音まで、知識や思想や経験など、自分の持っているすべてのものを動員し、じっと耳を澄ませば真実の姿がみえてくるのです。

感覚でとらえたもの、心に刻み込まれたものを、何度も何度も意味づけながらそれを思想にまで高めていく。「感じる心を育てる」—「意味づける」—「思想化する」—、これが教育の本道であると私は今は思っています。

*ところで、「松井さんには、なぜちょうの音が聞こえるのか。松井さんは何者なのか？」

ということは、この場面だけを読んだのでは分かりません。

「松井さんにはなぜチョウの声が聞こえるのか。松井さんは何者なのか。は、「車の色は空の色」というシリーズを読めば分かります。」—こういう投げかけをすれば、子どもたちは競って「車の色は空の色」を読むでしょう。（読書指導につながります。）

「松井さんがちょうの声を聞くことができるのは、松井さんが狐だからだ。」と、私ならそう答えます。なぜなら、次のような記述があるからです。

（「ところで松井くん。すっかり仕事にもなれたようだね。」知らないお客が、いきなり「松井くん」とよんだので、松井さんは、おやつ、とおもいました。「きみが、たった三年で、これほどばけられるようになったとは、おもわなかった。」）（「ほん日は雪天なり」）。このお客というのは、実は狐で、松井さんは、訳の分からないまま、（だれが一番化けるのがうまいかという）狐のコンクールに引っ張り出されます。そして、松井さんがどんなに否定しても、狐たちから、もっともうまく人間に化けた狐として一等賞を贈られるというのがこの話ですが、ひじょうに興味深いのは、狐たちが、松井さんを、人間に化けた狐であると完全に決めつけている点です。そして、松井さんは、そのことを全然自覚していないという点です。すなわち、松井さんは、狐の世界から人間界に、何らかの目的

（自然を壊し、世界を崩壊させつつある愚かな人間たちに、元の豊かな自然を再現させて見せるという使命）を持って送り込まれたのに、当の本人はまるで自覚してはいないけれども、自然にそうふるまってしまうのです。

「やさしい天気雨」では、狐の花嫁さんの母親がこんなことを言っています。（松井さんが礼をいうと、外にでたおかあさんは、ドアのとってをもってふりむきました。にこっとわらっていいました。「おなかまの車にのったのは、きょうがはじめてでしたよ。うんてんがほんとうにおじょうずですねえ。」「はあ？おなかまの車？」と、まついさんがききかえしたとき、おかあさんはもう花よめのさんのあとを追って、ホテルのなかにはいっていきました。）

さらに、「ふうたの雪まつり」にはこういう場面があります。（駅のちゅう車場が見えたとき、ふうたはあくびをしていいました。「ねえ。おじちゃん。おじちゃんもほんとうは、きつねでしょう？ぼく、そんな気がするよ。」）

子どもたちはどんな答えを出すでしょうか。

*最後に、語り合う文学教育の会の実践を参考までに紹介します。

実践例一

・行っても行っても四角い建物ばかりなんやったらさ、なんで菜の花横町って言うん？ :

行き先を聞かれてすぐに答えていないな。松井さんは「菜の花橋のことですね。」って、どう思う？

松井さんのことば。「え、ええ、あのね」って言ってさ、「あるかしら」って言ったやん。女の子がもんしろちょうで、それで、タクシーに乗ったことないよって、こう言った。「え、ええ、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」って聞いたのは、タクシーに乗るの初めてやもんで、そんな言い方をしたと思う。「違う、違う。まったく違う。この女の子は、やっぱりもんしろちょうやと思うんさ。やもんで、もんしろちょうやもんで、なんか、もんしろちょうはさ、家とかさ、でっかいのいやん。飛びよるやん。せやで、菜の花横町っていうのは、このページなんやけど、六十ページの住んでるとこ、みんな集まるとこのことを、考えて、自分で名前つけて、で、たまたま、菜の花橋っていうとこがあつて、そうなったんかなって。たぶん、菜の花横町は、人間の世界ではない場所だと思うんだけど、ちょうの世界になって、人間の世界にあるのは菜の花橋で、ちょうは、人間でも菜の花横町でもだいじょうぶかなあつて感じで言って、で、あるかしらって聞いた感じで、それで松井さんは、菜の花橋のことって。：人間の世界とちょうの世界は違うのか。じゃ、四角い建物ばかりだもんって、ここは誰の世界なの？・人間。：人間なのか。道に迷ったっていうことは、この女の子は、行きたい場所があるっていうこと？・あるけど行けんの。・今どこにおるかもわからん。・女の子はさ、四角い建物ばかりだもんて書いとるもんで、女の子、ぼくももんしろちょうってやと思うんさ。知るよしもない。（：知るよしもない。かつこいい）それでこんな言い方しとる。・知るよして何？：知るわけがない。・ちょうの世界、分からんけど、自分が生まれた場所は、たぶん菜の花横町っていうとこで、おかつぱの女の子は、「どちらまで。」って聞いたら、ちよつと言いつらそうに、ちょうってばれたらいやそうな、そんなとこつてあるんかいなあ、人間の世界やったら、そんなとこつてあるんかいなあつて。：なんで言いつらそうにしてるん。・菜の花横町って知らんけど、言ったら、菜の花橋やって松井さんが言って、言いつらいのは、迷って菜の花横町って言ったけど、菜の花橋って言って、言いつらそうに。・この女の子が行きたいのは、松井さんは菜の花橋って言ったけど、本当に行きたいのは、ちょうが住んどる菜の花横町に行きたい。

実践例二

今日考えたこと

・夏みかんをいっぱいおくってくれたから、松井さんはおふくろのことを運転しながら考えてたんだと思います。「よかったね。よかったよ。」という声が松井さんに聞えたのは、それは松井さんが菜の花橋までのせてくれたから、お礼に聞こえるように言ったのだと思います。もう一つ、松井さんのことをちょうは信用できる人だと思ったから言ったのかもしれないとぼくは思います。

・小さな野原がなければ、クローバーやタンポポが咲いていなくて、草花がなければちょうもいない。小さな団地があるからいろいろできる。団地は、時々死んだように静かになるからそのときにもんしろちょう同士で話していることが聞える。松井さんが助けてくれたからお礼をほかのもんしろちょうに話している最後のところがちょう聞こえたりする。「良かったね。」とほかのもんしろちょうが言って「よかったよ。」がもんしろちょうにすがたをかえたおかつぱのかわいい女の子が言っている気が私もします。

・今日はぼくはいろんなことを思いつきました。まず、松井さんは耳がよすぎると思いました。そのわけは松井さんにはちょうのお化けが見えたりシャボン玉のはじけるような音が聞えたからです。でも、その前にタクシーの中で女の子の声を聴いていたからできたのかもしれない。そしてこのちょうはきれいなものが好きだと思います。なぜかという、クローバーとわたげとたんぽぽがまざった点々のもようになって野原はきれいだからです。しろいちょうはきれいなところが好きだと思います。あと、たまたま仲間のところに帰れてすごうれしかったと思います。もつと、松井さんシリーズ

を読みたいです。

・松井さんはいなくなったおかつぱの女の子のことが心配であせっていました。松井さんはようになった女の子の小さな声まで聞こえていたので、松井さんはわかっていないけど、本当は松井さんもちょうのお化けなのかなと思いました。「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」とちょうが言っていた理由は、「よかったね。」、夏みかんのにおいがまだまだただよっていてよかったと言っていて、「よかったよ。」はみんなところにもどれてよかったんだなあと思いました。おかつぱのかわいい女の子には二十も三十も仲間がいてとても楽しい生活になっていて、まいごになってもお化けだから松井さんのタクシーに何回でものせてもらえるので幸せだなあと思いました。

・わたしは、「よかったね」「よかったよ。」のところにはたくさんの思いがあると思います。たとえば、「よかったね」のところは「かえれてよかったね。」とか、「にげれてよかったね。」「ここにもどれてよかったね。」とか。「よかったよ。」のところは「あの男の子につかまったときはもうだめかと思ったよ。」「ここにもどれて本当によかったよ。」「あの男の人のおかげだよ。」とか。たった一言にいろいろな言葉がつまっているとわたしは思いました。シャボン玉がはじけるような感じで話したということは、「よかったね」とすぐに「パチッ」という感じで声が切れたようです。小さな小さな声だったらちょうがしゃべっていると思います。

・ぼくは今勉強して初めて分かったことがあります。ちょうの声が聞こえたのは、まえに女の子の声を聴いたから、ぼんやり見ていたちょうの声が聞こえたのではないかなと思いました。あと、いくら聞こえたとしてもちょうは小さいから、小さな小さな声だったんだと思います。ぼくはなぜ「夏みかんのにおいがかすかにのこっている」ということを書いたのかは、松井さんが今日一日のことを思いだしてんだと思います。ぼくは、同じ物語をなんと読んでもちがう答えがでてくるんだなと思いました。松井さんはおふくろのことばっか考えていたからお化けが出てきたんだと思いました。